

パラワン島(フィリッピン)モスLEM部落との接触過程

野口, 武徳
成城大学

<https://doi.org/10.15017/2231513>

出版情報 : 九州人類学会報. 2, pp.14-17, 1974-10-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :



パラワン島（フィリピン）モスレム 部落との接触過程

成城大学 野 口 武 徳

1. 東京にて

1969年夏、時のPANAMIN(Presidential Adviser of National Minorities)の代表、Mr. Elizalde Jr. がはるばるフィリピンから東京へ来られた。目的は経済的な資金、医療など、フィリピンの少数民族救済のための、日本の援助を要請するためで、そこには、当時文部省の海外派遣留学生としてフィリピン国立大学に留学、かつバナミンのメンバーとして活動中の菊地靖氏（現在早稲田大学助教授）が、案内兼通訳として同行しておられた。その1日のランチョン、私は古野清人、岡正雄、蒲生正男、村武精一の諸先生等と一緒に、招待の栄に浴した。日本の人類学者が、こういう企画にどれだけ協力できるか、皆目見当もつかないのであるが、金のない連中に可能なことは、ひとつのプロジェクトを、それが少数民族の場合はとくに、よりスムーズに成功させるための一端としての調査には、微力ながらお手伝いできるのではないか、という、ささやかな提案になったかと思う。もちろん私は、たゞ末席を汚したに過ぎず、仲間や先輩諸兄が、メスティーサであるエリサルデの美人秘書に目を奪われている間、私は小柄で色黒の、あきらかにフィリピン人と判る、1人の新米と見える秘書の楚々とした動きに、気を動かされたことを覚えている。しかし、このお嬢さんノリジャン・ナラシッドとの出会いが、私が急に、フィリピンのモスレムと関係を持つきっかけになったのであった。折りも折り、一行の中心スタッフは関西へ行くことになり、東京に残留の彼女等の案内を菊地君に頼まれた私は、喜び勇んで、それを引受けた。しかし、それは不成功に終わった。彼女等が、カルチュラル・ショックで倒れたのである。私はノリジャンとの今後のコンタクトと紹介を菊地君に頼んだ。

私は無差別にフィリピンを、あるいはモスレムを選んだわけではない。学部卒論を長崎県の漂海漁民「家船」の社会的緊張に関する調査研究でまとめた私は、東南アジアの同種の民族、とくにその陸地定着過程における文化変容に関心を持って、大学院へ進んだ。恩師である馬淵東一教授のアメリカ行きにより、急拠、修論は、沖縄宮古群島の代表的カツオ漁村池間島の社会人類学的研究でまとめるを得ず、（当時の基礎データは、未来社『沖縄池間島民俗誌』にまとめた。1972）、南方への夢は後日に持ち越さざるを得なかったわけである。そこへころがり込んできたまたとないチャンスであった。

2. 東京－マニラ

その後、菊池君を介して、何回かの通信が交換され、バナミンからの招待状も来た。私は実現のた

めの準備を続けた。また1970年春、卒業と同時に、私のゼミの学生、藤倉まり子さんが、パナミンのボランティアとして、単身フィリピンに行き、バラワン島のバタック・プロジェクト（採集狩猟民のバタック族を定着させるため、教育、医療、キリスト教化など）に参加して、活動を開始した。彼女の活動は、多くの現地の人々に愛され、新しい時代の、新しいタイプの日本の若者の姿を印象づけた。メモをとれと指示した私の助言にしたがって記録された彼女の愛らしい本『オレンジ色の青春』（自家版）をひもどくたびに、このような女性が、これから先、いつ私のゼミから出てくるであろうかと、いつも当時を思い出す。末娘を単身未開社会に派遣することを認め、励まされた父君、藤倉修一氏（元NHKアナウンサー）及び母上の、愛情の深さが忘れられない。その期待にこたえて、喜びと、そして時にはやりきれなさ、悲しみに耐えながら、彼女が、人間的にひとまわり大きく成長したことが、私は嬉しかった。

このようなこともあり、より具体化した形で、台北、香港経由、マニラに向った。時に1970年の7月初めであった。

3. バラワン島バタラサ郡マランガスへ。

マニラ滞在は思いのほか長びいた。種々のトラブルが介在したのであるが、8月中旬、私は菊池君にしたがい、バラワン島の主邑、プエルト・プリンセサに向けて飛びたった。マニラ滞在中は、せっせとパナミンのオフィスに通い、ノリジャンや、その兄弟姉妹達とは毎夜のようにデートを重ねたし、藤倉まり子さんにも現地で逢えたことは嬉しかったし、菊池君のアパートでの同居生活は、フィリピンへの慣れという点で、今思えば、無駄な毎日ではなかった。

プエルト・プリンセサからは、バラワン島南部の西海岸、シカゴ出身の米人でフィリピン人類学の第一人者であるDr. Fox が、有名なターボン・ケープの発掘の時に使った家がある、ケソンの部落にまず直行した。フィリピンの国立博物館の施設として、残され、多くの研究者が内外の国籍を問わず利用しているわけであるが、約10日間、我々もそこに滞在した。毎日海岸部の漁民部落へ行ったり、菊池氏やガイドについて、山地に住むバラワン族の一支族を訪ねたりした。食事の世話をするメイド、ジャーナラーとして働くタータン（おじさんの意）やその娘さんシシリア（小学生）との交流を通じて、私の現地への適応は少しずつ進んで行った。宿舎のそばの小川での水浴で小さい魚に足をかまれたり、菊池氏が山で現地人の残した竹筒に入っている水を飲んだが為に、猛烈な下痢で一晩中悩まされたり、コブラのはう音におびえたり、その思い出はつきない。子供の頃からのいろいろな体験のせい（異国での少年時代、引揚げ）、不思議とつらい思い出は残らない。菊池氏という経験者が一緒だったせいもあるが、何よりも、どこへ行っても、その土地でエンジョイする何物かを見つけ出そうとする、私の性分のせいもあるかと思う。まだ誰もが眠っている早朝のケソン村、私は霧がしだいに薄れゆき、このミルクを流したような霧のカーテンの間から熱帯の木々が少しずつ、その力強く、若々しい姿をあらわす。東の空が明かるくなり、大きなトカゲが素晴

しいスピードで動き、木に登るのもある。宿舎のベランダ状の所で、机に向い、メモをとったり、前日の日記をしたためる私。その静けさの中から、音もなく老婆があらわれ、「アメリカン・ブレッド」と声をかけてくる。「おはよう」と言いながら、いくつかの朝食用のパンを選ぶ、私と老婆の間に、一瞬の心が通う。お互いが何を考えているかはさておき、そこは平和の一語に尽きる。

5年を経た現在、考えて見ると、マニラやケソンでの生活は、一見無駄なことののように思えるかもしれないが、初めてのフィリピン社会との接触であった私にとって、決して無駄ではなかったと思う。むしろプラスの要素の方が大きかった。1回きりの調査ならともかく、それから1回、2回と同じ場所に行くようになった私が、1人でいろいろな交渉をし、友達を作り、それに頼ってゆけるようになったのも、ひとえに、この第1回目の菊池君との旅が、ものを言っているのだと思う。

8月も末、いよいよ最終の目的地、パタラサ郡のマランガスに行くことになった。パラワン島のモスLEM部落とのコンタクトの達成という意味で、これだけはしておかねばという緊張感が私にはあった。フィリピンにおけるクリスチャンとモスLEMの対立・葛藤の話題は多く、多くの人が、危険だから、止めるように忠告してくれたが、私はえこじに、その接触到固執し、菊池氏をも悩ませたことと思う。ケソンの最後の夜は、いろいろお世話になった人々と、一夜パーティを開いた。トイレへの水の補給、燃料の準備などをするタータンは、第2次大戦中、日本軍の為に、親兄弟全部を失った男だ。この老いた、しわの深い老人に、こちらから所望して歌ってもらった歌は、今も私の心に残る。「人間は皆同じ。同じように母から生まれ、そして死んでゆく」という意味だ。のちに下宿をさせてもらった、マランガス部落のナラシッド家の主人、サフィオディン・ナラシッドが、やはり私との別れの前夜語った、「フィリピンのクリスチャンは、キリスト様のようなではない」という言葉とともに、フィリピンの社会と、そこに住む、個性豊かな、さまざまな人間の生き方を考える時に、いつも浮んでくるイメージの一つなのである。タータンはレイテで、そしてナラシッド氏には、19世紀末のスペイン、そしてアメリカ支配に対抗し、あるいは兄弟で争った、スルーのサルタン一家、パラワンへの移住を余儀なくされた、彼等の祖父達の苦悩が、今でも生きているからだ。

早朝、まだ暗いうちに、頼んでおいたパラワンの重要な輸送機関であるトヨタ（マイクロバスの通称。ちなみにカメラはコダック、歯みがきはコルゲートを言う）がやってきた。途中、乗り換えをし、車は一路、西へ南へと、パラワン島の南部の山麓地帯の東側、スルー海を左に見てひた走り、午後のブルクス・ポイントに着く。ここで道路は終り（現在はやゝ南まで、広い道が建設中である）、我々はパタラサ行きの舟の交渉に入る。ここでも若干の緊張場面に出会った。PC（国家警察軍の駐屯地。パラワン島南部は、北ボルネオとの密輸が多く、政府は目を光らせ、チェック・ポイントも各地にある）を訪ねたところ、護衛に兵隊をつける、つけないとどうなるか危い。などと言われる。菊池氏のすゝめもあったが、これだけは、と私は私の我を通してもらった。政府と感情的な対立をしているモスLEMの部落へ入るのに、（パラワンは、今のところミンダナオ島やスルー諸島ほどではないが）、政府の軍隊と銃に護衛されてはという意識が働いたからである。それでその申し出はことわ

った。一隻の、左右にアウトリiggerをつけた舟（パンカ）で、スルー海を南下する、鏡の如くおだやかなスルー海であるが、エンジン・トラブルなど起し、漂流をはじめるときなど、初めての私の心は、決しておだやかではなかった。2時間ばかり走って、夕方の太陽はまだ高い頃、我々は楽園かとまどうほどの、マランガスの浜に着いた。リュックを浜にあげ、大地に第一步を記す。岸から100m位はなれた、ココナツの林、点々と散々する現地人の小さな家、その側には無言の人々が、こちらの動きを見ている。菊池氏に、そしてPCに言われた言葉に動揺している私の緊張感はさらに高まる。「どこから、弾や矢が飛んでくるかわからない」という言葉である。足が地に着かぬまゝ、一方において、ここで殺されても良い、という開き直りのくせが出る。これもまた私の少年時代の体験の結果のようである。幼き日の強烈な緊張体験は、いざという時、妙に人間をふてぶてしくする。逆にまた、これは、どんな場合でも、楽天性ともつながってゆく。

ココナツの林を過ぎ、ノリジャンの紹介状を片手に、たずねたナラシッド家は、もう眼を奪うばかりの、色とりどりの花と樹々に囲まれ、小鳥のさえずり以外は、物音一つ聞こえぬ平和なたゞずまいであった。見上げるバタラサの連山には、遠く、高く白い雲がたなびいて、空の青さが目にしみた。

今から懐古すれば、たどりつくまでの緊張の連続は、おかしいほどでもあるが、かつて差別された海の漂海民の調査経験をもつ私には、言語や価値観も共通でない、フィリピンのモスレム（モロ族）との接触には、たいへんな緊張をし、いろいろ留意したものであった。ダツ・サフィオデン・ナラシッドは旅行中であつたが、ミセスの方はいて、マニラであつたノリジャンと、そっくりの顔で、私を喜ばせた。その夜の歓待の様様については、これを略しよう。

マランガスの滞在は短かったが、別れ際に、お礼を言いに行つた私に、片言の英語しか話せぬ、この母が「カム・アゲイン、カム・アゲイン」と小さくさゝやいた言葉が忘れられず、この馬鹿正直な、おめでたい人類学者は、今でもつきあい続けている。小さな私大の教師であるゆえ、長期滞在中もできず、せいぜい1回2ヶ月の調査であるが、同じ所に何回も行くということは、またちがつた効果があるのではないかと、ひそかに、心に期するものがあるのである。

また義理・人情、名誉心の尊重などという、いわば日本の村落社会的な価値観や礼儀が、ある程度は、フィリピンのモスレム社会でも通じるのではないかと、最近少しずつ感じ始めている。それは相互扶助の発達した社会構造とも関係しよう、洗礼親族というか、ゴッド・ファーザー、ゴッドブラザーの関係の強さとも関係しよう。もちろん親族関係の拡大したネット・ワークの強さは、今北ボルネオで調査する時にも、思恵となっていることをつけ加えておきたい。

＜付記＞ 私の発表は、スライド・フィルムを使っての一般的なマランガスの生活の紹介であつた。レジュメを請求された時、記述の焦点を合わすのに、苦労したので、ここに、何らかの参考になればと思い、公的なバックや、調査団という組織に属さない、1人の人類学者の、現地とのコンタクトの仕方の一例をご紹介申しあげた。レポートは改めて、後日まとめあげるつもりである。スルー海周辺の回教徒の調査、これが当面の私の課題である。